

C I S M O R V O I C E 6

Spring
2007

2-3

CISMOR国際ワークショップ2006

4-11

特集 京都 2

平安京と仏教
室寺義仁

京都のお寺、日本の仏教
高田信良

京都とキリスト教
越後屋 朗

フォトギャラリー

12

第2回CISMORユダヤ学会議

13-15

研究会報告

16-17

スタッフ紹介

18-19

CISMORインフォメーション
マレーシア夏期研修プログラム報告



C I S M O R

Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

CISMOR国際ワークショップ2006

『『ヨーロッパ』という自己理解と一神教』

日 時：2006年11月4-5日

会 場：同志社大学 今出川キャンパス 明德館21番教室 新島会館

一神教学際研究センターは毎年11月に国際ワークショップを開催し、特定の地域における一神教の課題を検討してきた。2004年度はアメリカ合衆国、2005年度は東アジアを取り上げたが、今年度はヨーロッパ(EU)に焦点を絞った。

『『ヨーロッパ』という自己理解』がEU諸国にとっての緊急の課題となっている原因は、ヨーロッパ諸国におけるムスリム移民とムスリム系市民の増加であることは明らかである。EU統合の理念はイスラームの宗教伝統と共存できるのか。基本的人権の尊重、民主主義、多文化主義というEUにとっての基本的理念は、『ヨーロッパ』の歴史的伝統を十分に反映したものであるのか。

イスラームとの関係だけでなく、第二次世界大戦後のヨーロッパは「ホロコースト」という歴史的トラウマを抱えており、つねにこれを意識しつつ、自己規定を行ってきた。ホロコーストの背景には、ヨーロッパにおける伝統的な「反ユダヤ主義」が存在している。「反ユダヤ主義」と今日の「イスラーム恐怖症」のあいだには、共通点はあるのか。

「ムハンマドの風刺画」事件に象徴されるように、かつて「キリスト教世界」であったヨーロッパは、アメリカ合衆国とは異なり、今日、世俗主義(反宗教)が支配的である。『『ヨーロッパ』という自己理解』にとって、3つの一神教の関係だけでな

く、宗教と反宗教(世俗主義)の対立は、重要な要素となっている。このような歴史的・政治的・社会的・宗教的・思想的背景をもった『『ヨーロッパ』という自己理解』の問題を、今回の国際ワークショップでは、とくに一神教に焦点を絞り議論を行った。

過去2回の国際ワークショップと比べて、今年度は海外から招聘する研究者を4名に絞った。ヨーロッパのイスラーム系思想家を代表する存在であるターリク・ラマダーン氏をはじめ、すべての招聘研究者はヨーロッパにおける一神教が抱えている問題について、示唆に富んだ興味深い報告を行い、日本からの参加者とのあいだで白熱した議論を展開することができた。

次頁にヨーロッパからの招聘研究者と、2日間にわたって行われた4つのセッションのプログラムを紹介する。

なお、一神教学際研究センターは今年1月に明石書店から、国際ワークショップのテーマに関連した『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか ―「ムハンマドの風刺画事件」の本質―』(森 孝一編著、同志社大学一神教学際研究センター企画)を刊行した。

(同志社大学大学院神学研究科教授 森 孝一)



11月4日(土)

第1セッション

公開シンポジウム『『ヨーロッパ』という自己理解と一神教』

司 会：森 孝一(同志社大学)

講 演：ターリク・ラマダーン(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(ブリュッセル))

『『ヨーロッパ』という自己理解と一神教』

リズベット・クリストファーセン(コペンハーゲン大学)

『『ヨーロッパ』という自己理解へのキリスト教の貢献』

アブラハム・ソーテンドルプ(進歩的ユダヤ教世界連合)

『自己理解への葛藤』

ハミット・ボザルスラン(イスラーム・イスラーム社会研究所(フランス))

『『ヨーロッパ』という自己理解と一神教』



11月5日(日)

第3セッション

『ヨーロッパにとっての反ユダヤ主義』

司 会：手島勲矢(同志社大学)

発 表：アブラハム・ソーテンドルプ

『ヨーロッパにおける反ユダヤ主義 ― 治癒可能な病か? ―』

コメント：菅野賢治(東京都立大学)

第4セッション

『ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか?』

司 会：小原克博(同志社大学)

発 表：リズベット・クリストファーセン

『複数の公共宗教 ― 複雑に絡み合う聖・俗政治とヨーロッパの未来―』

ハミット・ボザルスラン

『『ヨーロッパ』という自己理解と一神教』

コメント：中田 考(同志社大学)



特集

京都 2

栄西禪師が開山した臨済宗建仁寺派大本山・建仁寺の大雄苑

平安京と仏教

室寺義仁
むろ じ よしひと

1981年高野山大学文学部
仏教学科卒。1986年京都
大学大学院仏教学専攻博
士課程修了。ハンブルク大学
インド・チベット文化歴史研究
所で研究。1993年Dr. der
Phil [ハンブルク大学]。現
在、高野山大学文学部教授。



京都といえば神社仏閣、寺院がひしめく仏教の都。平安建都の昔からそうだったと思われるであろうが、桓武天皇の平安遷都（西暦 794 年）当初、京内に寺院

はなく、羅生門の東西に東寺と西寺が、王城守護の官寺として創建されたのみであった。806 年に桓武天皇崩御、平城天皇が即位。3 年後には、弟の嵯峨天皇

が即位する。直後の 810 年、「葉子の乱」が起こり、平城上皇方の平城遷都などの策謀が敗れ、「先帝（桓武帝）の万代宮と定め賜える平安京」が嵯峨天皇によって確立。しかし、京中に他の寺院が造られるには、鎌倉時代も末期、日蓮の法孫、日像の登場を待たなければならない。

この桓武朝・嵯峨朝の時代機運に乗って、新しい日本仏教の礎を築く、最澄（767-822）と空海（774-835）が現れる。王城鎮守の比叡山延暦寺と言え、伝教大師最澄。教王護国寺の東寺と言え、弘法大師空海。桓武天皇は平安京遷都の 10 年前に、まず長岡京に遷都した。その時最澄 18 歳。翌年奈良東大寺戒壇院で受戒し僧侶資格を得ると、比叡山に草

庵を構え、3 年後に比叡山寺を建立する。平安遷都後の 797 年、宮中の道場に仕える官吏となる。804 年、遣唐大使に随って入唐し、天台宗という、日本に入っはいたが、宗派としては未樹立の教学を学び、翌年帰国。806 年、それとは少し異なる日本の天台宗を開いた。奈良の諸大寺は小乗の僧を養成するのみと批判し、大乘仏教の戒律で受戒できる戒壇を比叡山上に設立、真に護国の僧達を世に送り出すことを念願した。一方、時を同じくして、797 年、都の大学にいた 24 歳の空海は『三教指帰』を著し、儒教・道教・仏教の優劣を論ずるが、その後、官吏への道から離れる。804 年、東大寺戒壇院で受戒、留学僧として入唐、唐に伝わって半世紀余りの最新仏教を学び、翌々年に帰国。それに基づきながらも、真言宗と名づけた新宗派を開いた。834 年、唐の内道場に準じ、宮中真言院で、正月朝儀に続く仏教行事、後七日御修法（ごしちにちみしゅほう）を修することが認められた、その翌年のことである。

奈良時代に鎮護国家の宗教として、仏教は受け入れられた。平城京では都の中心に多くの寺院が建てられていた。それらが平安京に遷されなかったのはなぜか。また、最澄も空海も、なぜ東大寺で受戒して、そのまま比叡山を預かったり、都の中に寺院を建てたりすることができず、唐から新しい仏教を持ち帰る形を取ったのか。これは、平安建都の第一義が、桓武・嵯峨天皇に代表される天智系の天皇たちが、平城天皇に代表される天武系に操られる旧勢力を一掃して、真に新しい都を建設することにあったためであるらしい。新しい都の鎮護国家には、新しい仏教が必要だったのである。

ところで、仏教とは、簡潔に言えば、ブッダが創始した教えである。ブッダとは、インドのサンスクリット語で「覚者、真理に目覚めた人」の意味。漢語の音写表記が「仏陀」である。紀元前 6 世紀から 4 世紀のある時期（一説に紀元前 463-383 年）、ガンジス川の中流域を活動の中心として、80 年の生涯を送った実在の人間である。姓名は、ゴータマ・シッダールタ。現在のネパール国の中部地域にあったサーキヤ族の国王長男として誕

生。生後まもなく母を失い、16 歳で結婚して一男をもうけるが、苦しみに満ちた人の生に思い悩み、29 歳で出家。妻子を捨て、断食などの苦行に入った。当時は、再生を繰り返しては、また後の世でも、病・老・死に代表される生の苦しみを受けるという、輪廻の苦から解脱する方法を求めて、苦行を行なう者達が数多くいた。シッダールタは 35 歳で苦行を捨て、瞑想を繰り返し経験することにより、「もはや二度と再び生まれ変わって、この苦しみを受けることはない」という覚知に目覚めた。伝統的な言葉で、成道あるいは開悟、大悟と表現される体験である。彼はこの瞬間から、ブッダとなった。仏教の出発点である。ブッダは、その後半生、約 45 年に渡り、覚知した内容を人々に説き続ける。また、教えを求めて来た人々を諭し、出家させ、解脱へと導いて行く。ブッダ直接の教えに随い、世俗を離れた清浄な修行生活によって、苦の原因である欲望を捨てて覚知を得、解脱した「阿羅漢」たちは、500 人と伝えられる。

仏教の始まりにおいて、仏教は個人の心の安寧救済を説くのみであり、全く現世利益的なものを含まないし、国を護る役割も持たない。当時インドにおいて、そうしたことは社会規範も含め、ヴェーダの昔からバラモンが司るヒンドゥ教がすべて支配しており、家族も生業も捨てて生涯出家生活を送ることを唱導する仏



孔雀明王（福知山市大江町観音寺所蔵）



弘法大師像（香川県歴史博物館所蔵）

教は、反社会的と言わないまでも脱社会的な、異端的宗教であったと言わざるを得ない。後に大乘仏教が起こり、仏教もまた在家信者たちを包括する教えへと広がって行くが、仏教がブッダの教えを根本に置く限り、現世に背を向ける傾向は、残り続けていくのである。

繰り返すが、本邦において、仏教は鎮護国家の宗教として受け入れられた。奈良仏教は、毘盧遮那（びるしゃな）仏を中心とした華嚴の世界として寺院を建立し、この世に仏国土を描こうとした。しかし仏国土は本来この世とは離れた彼岸の世界であって、この世で実現することはできない。この世を支配し、叶うならば永遠に我が一族で支配し続けようとする権力者にとって、本来それを保障してくれる教えを持たない外来の宗教が、どれ程の意味を持ち得たであろう。旧勢力を一掃し、新しい都を建設しようとした為政者たちは、自らが永遠の支配者であることを保障し、安定した国家を護ってくれる、新しい仏教を求めたのであろう。こうして当初、平安京では天台・真言の「密教」のみが認められる。密教の中心思想は、修行して灌頂を受けることにより、生身の人間がそのまま絶対的存在（いわば活仏）になって、現世的活動をし続けることができ、また、絶対的存在を勧請して、現世利益を祈禱する儀式を行なうことができるという点にあると考えら



愛宕山月輪寺にある浄土真宗の開祖・親鸞聖人像
(撮影：高橋 徹)



最澄によって開かれた天台宗総本山・比叡山
延暦寺 根本中堂 (撮影：高橋 徹)



浄土宗西山禅林寺派総本山・禅林寺（永観堂）。
紅葉の美しさで有名。(撮影：澤村容子)



糺の森。下鴨神社の南側に広がり、太古からの原生林が残る。源氏物語の中で「憂き世をば 今ぞ別るとどまらむ 名をば糺すの神にまかせて」と光源氏も歌っており、世界遺産にも指定されている。
(撮影：澤村容子)



姥柳町遺跡線刻硯
(同志社大学歴史資料館所蔵)



嵐山・渡月橋。亀山上皇が曇りのない夜空に月がさながら橋を渡るようなさまをみて「くまなき月の渡るに似る」と感想を洩らしたことから、「渡月橋」とよばれるようになった。(撮影：高橋 徹)

南蛮寺の礎石 (撮影：澤村容子)



1890年7月当時の同志社英学校 (同志社社史資料センター所蔵)

第2回CISMORユダヤ学会議

「ユダヤ学の多様性：取り巻く異文脈との対話」

日 時：2006年12月9日 10:00-18:15

会 場：新島会館

【セッションA：古代オリエントと聖書】

司 会：越後屋 朗(同志社大学大学院神学研究科)

オープニング：手島勲矢(同志社大学大学院神学研究科)

発表1：山田重郎(筑波大学人文社会学科研究科)

「列王記とメソポタミアの歴史文書」

発表2：石川 立(同志社大学大学院神学研究科)

「イスラエルによる周辺思想の受容 ―詩編の場合―」

コメント：アダ・タガー・コヘン(同志社大学神学部)

池田 裕(筑波大学名誉教授、中近東文化センター)

【セッションB：中世におけるイスラームと聖書】

司 会：市川 裕(東京大学大学院人文社会系研究科)

発表1：中田 考(同志社大学大学院神学研究科)

「イスラームにおける神の言葉としての聖典の意味」

発表2：鎌田 繁(東京大学東洋文化研究所)

「イブン・ハズムとユダヤ教」

コメント：中村信博(同志社女子大学学芸学部)

勝村弘也(神戸松蔭女子学院大学文学部)

【セッションC：ユダヤ民族と近代法】

司 会：臼杵 陽(日本女子大学文学部)

発表1：石崎嘉彦(摂南大学外国語学部)

「権利と法について ―シュトラウス政治哲学の視点から―」

発表2：長尾龍一(日本大学法学部・東京大学名誉教授)

「戦前期独逸公法学におけるユダヤ人 ―日本公法学との関係で―」

コメント：大塚和夫(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

柴田寿子(東京大学大学院総合文化研究科)



12月9日、「古代」「中世」「近代」の歴史区分を意識した3つの部門からなる CISMOR ユダヤ学会議が「ユダヤ学の多様性：取り巻く異文脈との対話」と題し、多様な分野から代表的な学者を招いて行われた。日本国内では唯一とっているユダヤ研究に特化したこの CISMOR ユダヤ学会議では、異分野の専門家たちが自らの専門文脈に関係するところのユダヤ議論を持ち寄るだけでなく、古代から近代までの広範な範囲に亘る専門家たちが全部門の議論に参加することで、それぞれの研究文脈の歴史的な区分・視点を越えることが目指されている。この高度な学際性の意識は国際的なユダヤ学のスタンダードから見ても貴重なものであり、日本の学問土壌ならではのユダヤ学会議である。特に、今回はユダヤ性ならばユダヤ教聖典がどのように他分脈の中で理解されるのかの観点から新島会館別館2階会議室に、雨のそぼ降る中、一日缶詰になって熱心に発表に傾聴し議論に参加した。

「古代」部門では、山田重郎氏の古代オリエント文書と聖書の歴史記述の比較論、石川立氏の聖書の詩文学における古代カナン文学の影響の可能性が提示され、その後の議論では聖書を読解する近代的な視点・学問前提について、また聖書文学の独自性またユダヤ学の視点・アプローチの特異性についての質疑へと導かれた。「中世」部門では、中田考氏によるイスラーム聖典観とユダヤ・キリスト教聖書観の比較論、および鎌田繁氏によるイブン・ハズムの聖書批判の紹介に啓発されて、はたしてユダヤ・キリスト教で展開された近代的な聖書批判に比するものがイスラームの文脈では可能かという議論へと導かれた。「近代」部門では、法理解をめぐる近代ユダヤ人レオシュトラウスの特異性を題材に石崎嘉彦氏が政治思想の新たな展開の必要性について論じ、さらには日本の憲法学とドイツで活躍したユダヤ系法学者との関係の該博な知識を長尾龍一氏が開陳された。西欧および日本の近代法の理解の文脈におけるユダヤ的要素の影響と意義についての更なる研究の必要性を実感させられた。各部門におけるコメントは、いずれも発表者の内容理解を深化させるに示唆に富み、より立ち入った議論が望まれる問題提起でもあった。全会議の詳細な内容については、『CISMOR ユダヤ学会議』第2号にて報告される。

(同志社大学大学院神学研究科教授 手島勲矢)

部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

第3回研究会(2006年10月21日)

場所:同志社大学 今出川キャンパス
寒梅館6階大会議室

研究会テーマ「ユダヤ世俗主義の原型を探る：宗教と政治の関係」

「スピノザ:西欧思想史に見る異性体 ―その神観と倫理・政治思想―」

河井徳治(大阪産業大学名誉教授)

“Machiavelli, Spinoza and Leo Strauss-Philosophy and Religion”

飯島昇蔵(早稲田大学政治経済学術院教授)

河井氏はまず、スピノザが西欧近代において思想的伝統に組み入れられなかった思想上の異性体であった述べる。異性体とは、分子式は同じであるのに化学構造が異なった性質を示す化合物である。河井氏はこの異体性という言葉スピノザの哲学に比喩的に転用する。つまり、スピノザもデカルトやホッブズと同様に、同時代の人間観や世界観を語る哲学の諸概念を用いて自らの哲学を語っているにもかかわらず、実は当時の西欧の哲学者たちとは根本的に異質の哲学を語ろうとした哲学者であったというのである。

それは神観において現れる。スピノザはデカルトと同様に、神が万物の起成因であり、これを実体という概念を用いて語る。しかし、その神という実体の属性の一つに、精神の属性である思惟と並んで、物体の空間的な広がり意味する延長の本性を帰属させる。スピノザにとって神が万物の起成因であるならば、神は思惟の始源であるとともに延長の始源であった。

また西欧思想の伝統における生命活動観においても、スピノザの異性体的な特質は現れている。元来西欧思想の伝統として、神を形相の形相として示すことから、質料に対する形相の優位、肉体(身体)に対する魂(精神)の優位が説かれてきた。しかしスピノザは精神と身体の一に生命活動を見ている。このような考え方は、神に延長の本性を帰属させることによって生まれるものであり、西欧のキリスト教的神観とは一線を画している。

おわりに河井氏は、スピノザと宮沢賢治の親近性と異性体の問題点を指摘して発表を締めくくった。(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学神学研究科博士後期課程 森山 徹)

このところネオコンの影響で、その思想的源泉の一つと言われるレオ・シュトラウスに注目が集まる

ようになった。では、シュトラウスとは何者かという、実はその点から解釈が分かれている。一般的には、シュトラウスは哲学者であるとは見なされていない。シュトラウス自身、自分は政治哲学を研究する学者の一人にすぎないと言っている。しかし近年、シュトラウスは哲学者であるという解釈も出てきており、さらには、宗教者であるという解釈もある。はたしてシュトラウスは哲学者なのか、宗教者なのか。

シュトラウスは、近代の政治哲学がどこで始まったのかということを非常に問題視した。最初はホッブズからだと考えたが、のちにマキャベリからだったと修正している。そして、そのことを教えてくれたのはスピノザだったと言う。

シュトラウスは、スピノザを批判しているところもあるが、両者には重なる部分もある。シュトラウスが何者であるかということは、俄かに答えの出る問題ではないが、その手がかりは、マキャベリやスピノザとの関係でシュトラウスを考察することにあるといえよう。(CISMOR奨励研究員・京都市人間・環境学研究所博士後期課程 藤本龍児)

第4回研究会(2006年12月16日)

場所:同志社大学 東京オフィス

研究会テーマ「一神教と多神教:インドの《一神教》理解について」

「古代インド・イランの宗教から見たい神教」

後藤敏文(東北大学大学院文学研究科教授)

「宗教伝統の権威論証とインド哲学:護教論理と寛容精神」

丸井 浩(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

『リグヴェーダ』とゾロアスター教は同時代の隣接舞台に存在しており、言語的にも共通の源から発している。後藤氏は今回の研究発表で、インド・イラン共通時代に焦点を当て、印欧語族拡大の歴史と、「一神教」を語る上で無視することのできないゾロアスター教が有する壮大な背景の一端を紹介した。氏はまず『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」の中に多数例示されている語彙や観念の歴史的背景に着目しつつ、比較言語学の見地から印欧語の言語的、概念的な広がりを辿った。次いでインド・イラン共通時代に見られる「DevaたちとAsuraたち」という神々の二重構造に注目する。そこには従来型の神々である「Devaたち」の他に、印欧語祖語に起源を辿ることのできない「Asuraたち」という社会制度の神々を見出すことができる。その神々をめぐる神話中に見られる末子相続からは、これまで印欧語族には全くないと言われてきた母権社会がインド・イランに出現し、変革をもたらしたことが知られる。また、ギンブタスの所謂クルガン文化の拡大からは、紀元前4500年頃、それまで女性中心の平和な自然状態にあったヨーロッパに、ドナウ下流域から突如防塞都市が出現し広がってゆく過程が跡づけられる。マリア・ギンブタスによると、この防塞都市の出現は、攻撃的な印欧語族が西へ拡大したこと



起因する。これらのことから、印欧語族が東西に拡大し、その過程で母権的社会と遭遇したことが推測される。東に進出したインド・イラン語派の人々の社会には、そこから逆に影響を受けた痕跡が認められる。また氏はゾロアスター教の主神「アフラマズダー」の「マズダー」を理性と解釈し、そこにゾロアスター教の特性が見られる可能性を指摘する。常に善悪を判断し、悪を排除する思考によって規定される性格である。インドの『リグヴェーダ』にも、自らの世界観の優先を謳う宣言は数多く見られる。善悪二元論、信仰告白の要素や極度の個人主義の根底には、印欧語族の攻撃的拡張主義と関係する要素があるように思われる。国教となったゾロアスター教では、部族や信条を守る武器として支配権という政治力学が重視され、次第に攻撃的性格を強めてゆくが、それは西方イランへの進出の過程で不可避免であったと思われ、また、印欧語族の拡大の歴史の中で繰り返し起きたことと軌を一にしている。世界史を紐解くと、そこには一言語(語派またはその下位の部族)による支配拡大、覇権奪取が散見される。世界史は印欧語族の拡張主義によって動いてきたと言っても過言ではない。しかし、そのような拡張の歴史の中に、アリストテレスに代表されるような「普遍的理性」の拡張もあったことに思いを致す必要がある。

丸井氏は、一般的に神秘主義的・実践的傾向が強いと見られるインド哲学の主知主義的側面を掘り下げ、特に宗教的権威をも論理的討究の地平へと持ち込もうとした<ヴェーダ聖典の権威論証>の議論を取り上げた。具体的には、相対立する二系統の哲学伝統(ミーマーンサーとニヤーヤ)の権威論証の議論を対比させながら分析した上で、同議論は宗教的ドグマの擁護に終始する護教主義一辺倒では決してなく、むしろその脱ドグマ的論理へと押し広げようとする主知主義の営みが、他宗教の権威論証の可能性をも引き寄せる結果となり、すぐれて論争的な性格を帯びているにせよ、それなりに宗教間対話の道筋を開くインドの思惟の一事例と見なしているのではないか、という方向性を示唆した。以上が丸井氏の発表趣旨の中核であるが、より詳しくまとめるならば、最初に西洋の哲学概念とは少なからず異なる「インド哲学」の特質を、「ダルシャナ」という概念の掘り下げを中心に説明した。ダルシャナとは特定の世界観、伝統的思想体系であり、かつ思想体系の骨子にあたる根本テキストに適宜、後代の解釈が付加されてゆく学知の伝統の総体を意味する。そうした伝統知は師から弟子へと伝

授すべきものと理解され、その意味で党派的性格を有していたが、同時にそこでは他の党派に伝達、納得させるための超党派的な反省知・論理的思考も重視された。とりわけそれは、仏教論理学者によってバラモン批判が展開されて以降（6-7世紀頃）、知識の源泉、判断根拠、正しい認識とその獲得手段を意味する「ブラマーナ」を巡って哲学的議論がダルシャナ間、異宗教間に活発になされたところに见られる。各ダルシャナ間の相違はあるものの、重要なブラマーナとして「知覚」（認識論）、「推理」（論理学）、信頼すべき言葉、教示を意味する「シャブダ」の三つが挙げられる。しかしとりわけ、シャブダを独立したブラマーナとして認めうるのかという議論は、哲学（論理）と宗教がせめぎ合う議論としてブラマーナ論においても特異な位置を占めていた。シャブダにはヴェーダを始めとする聖典が含まれるからである。それ故に、シャブダに関するブラマーナ論は、バラモン系正統派においてはヴェーダ聖典の権

威論証の問題と関係して議論された。氏は、ニヤーヤとミーマーンサーの両ダルシャナの論争を取り上げた。両ダルシャナともヴェーダ聖典の権威、ブラマーナとしての妥当性を認めたが、ニヤーヤはそれを「他律的」な権威だと考える。つまり、ヴェーダ聖典の権威は決して自明ではなく、それを語る者の資質によって成り立つのであり、とりわけ話者の知覚（覚知、神秘的直感も含みうる）に依存するものである、とする。一方で、ミーマーンサーにおいてはヴェーダ聖典の権威はそれ自体で保証される。ヴェーダ聖典もシャブダである限り、その妥当性は話者の資質に掛かっているとするニヤーヤに対し、それでは知覚などのブラマーナは最終的に何によって基礎付けられているのかという反論をミーマーンサーは展開した。このようなミーマーンサーの理論は、仏典とヴェーダの権威を巡る宗教間対立を孕んだ仏教との論争に刺激を受けて発達した面が大きいと思われる。そこでは両者ともお互いの聖典の権威を否定

しあったために深刻な対立を生んだのだが、そのことでこの議論はバラモンの思想内部の護教論的議論に留まることなく、他宗教との間の哲学的論争の性格を持つに至る。また、この論争は宗教的立場を異にする宗教的対立を越え、宗教（聖典）一般の権威問題にまで射程を広げている。つまり、全ての宗教（聖典）に権威を認めるのかどうかという問題が視野に入ってくるのである。この点に関しては、9世紀に活躍したニヤーヤ学者ジャヤンタ・パッタの論が興味深い。彼は『ニヤーヤ・マンジャリー』の中で、一定の制限を設けながらも他宗教の正当性を認める寛容主義的主張を展開しているのである。氏は、ヴェーダ聖典の権威論証を巡る護教論理と寛容精神の相克を今日の宗教観対話に接続し、考察上の示唆とすることはできないものかと模索している。（CISMORリサーチアシスタント・同志社大学神学研究科博士後期課程 上原 潔）

（CISMOR奨励研究員・総合研究大学院大学文化科学研究科 小河久志）

第4回研究会（2006年12月2日）
場所:東京・大手町サンスカイルーム D会議室

研究会テーマ「アメリカ中間選挙の分析」
「米中間選挙を読む 一福音派の動きを軸に一」
会田弘継（共同通信社編集委員室編集委員）
「中間選挙後のブッシュ外交」
村田晃嗣（同志社大学大学院法学研究科教授）

会田氏は出口調査等の資料を用いながら選挙結果を読み解いた。共和党に対し下院で28議席少なかった民主党は、今回の中間選挙では30議席以上の差をつけて大勝利、上院も過半数を制した。また、知事選においても民主党は躍進を遂げた。このような選挙結果をもたらした要因として、イラク戦争やブッシュ政権に対する国民の不満が高まるなか、民主党が無党派層や中道層の支持を得たことが挙げられる。会田氏はこのことを、保守的な傾向の民主党議員の大幅な議席数の増加や、カトリック、ヒスパニック、女性票の推移を具体的な数値を示して詳らかにした。今回の選挙ではシュワルツネッター知事（共和党穏健派）、スノウ上院議員（同）などの善戦という例外があるとはいえ、民主党中道派（保守派）が躍進し、共和党穏健派（進歩派）が後退した。人工妊娠中絶反対や銃規制反対などの保守的見解を持つブルードッグ派議員の躍進に顕著のように、民主党は「左」から中庸へと右シフトし、「価値values」の問題で共和党が右に寄りすぎて空けた真空を埋めることで選挙に大勝したのである。大統領選以降、民主党は価値問題に対して様々な努力を重ねてきた。例えば、Faith Working Groupによる信仰問題の見直し、候補者の教会ラジオへの積極的な出演、若手議員オバマの基調演

説（Call To Renewal）、FaithfulDemocrats.comの立ち上げなどである。全人口の25%を占めるエヴァンジェリカルの票の推移は、2004年に比べ民主の微増、共和の微減であり判断は困難であるが、頻繁に礼拝に出席している人々が民主党に投票していることなどからも分かるように、民主党は今回の選挙でいわゆるGod Gapを相当程度埋め得たと言える。また、価値問題への取り組みに際して、民主党とリベラル福音派が共に行動したということは特筆に値する。従来、福音派は価値問題として専ら中絶や同性婚の問題に焦点をあててきたが、そこではそれらの問題を越えて、環境問題や地球温暖化問題（Great Warming）、貧困問題などが取り上げられている。つまり、保守派や福音派の中にも様々な価値観の問題が出てきており、一概に保守的と決め付けることのできない多樣的傾向を見せはじめているのである。

村田氏は中間選挙の結果が今後のブッシュ外交に与える影響について考察した。今回の中間選挙は民主党の大勝に終わったが、大統領は外交・安全保障問題に関して絶対の権限を有しているために、この大勝が直ちにブッシュ外交の大幅修正

部門研究1・部門研究2 合同研究会

第5回研究会（2007年1月27日）
場所:同志社大学 今出川キャンパス 寧静館5階会議室

研究会テーマ「イスラームの現在」
中田 考（同志社大学神学研究科教授）
飯塚正人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授）

当COEプログラムの学際・複合性の更なる進展を目的として、今回はこれまでの研究会に共通した議論対象である「イスラームの現在」をテーマに、部門研究会を合同で行なった。

事前に参加者から発表者への質問を募り、中田、飯塚両氏の発表はそれらの回答を中心に行なわれた。質問はまずイスラーム世界における宗教と政治との関係が中心となった。例えばイスラーム国家における民主化基調の高まり、シャリーア（イスラーム法）と議会の持つ立法権との関係、パブリシティーとプライバシーとの区別、またウラマー（イス

につながることはない。むしろ大統領と議会多数派が政党を異にする「分割政府」では、かつてクリントン政権時に起こったような両すくみの膠着状態となる恐れもある。今後、民主党はイラク問題を巡って政権への批判を強めるであろうが、議会での優位を得た民主党の側にも責任が生じてくる。2年後に大統領選を控える今、民主党には「ブッシュ以外なら何でも」という「批判のための批判」を超えた建設的な代案が求められている。また、このような情勢の中で、民主・共和の反目を越えて両党の穏健派が融合し、勢力を伸ばし始めているとの論もある。ブッシュ政権にとって死活問題となっているイラク問題に対する解決案は様々であるが、その中でブッシュ政権、民主党の両者が注目しているのが「イラク研究グループ」と、その事実上の中心人物であり「トラブル・シューター」として名高いジェームズ・ベーカーである。超「リアリスト」である彼は、おそらくイラクの民主化を優先するのではなく、イランやシリアなど関係諸国との外交上の対話を進めることでイラク問題の漸次的解決を図るだろう。しかし、イラクに対し強硬路線を採った「ネオコン」から「穏健」へというこの道行では根本的な解決は望めない。そればかり

か、テロリストなどの非国家主体が大量破壊兵器を獲得し使用する危険性が高まるなか、既存の国際法や国際機関が機能しなくなりつつあるという事態、またそのような情勢においていかに安全保障を担保するかといった焦眉の問題が覆い隠される危険すらある。これでは短期的な利益をもたらしても長期的な利益とはなりえない。確かに手段やニュアンスに関してこれまでのブッシュ外交には粗暴な点が多々あったが、そのことで彼らが提起した問いや目的までもが否定されて良いのだろうかと村田氏は指摘する。以上の中間選挙がもたらす影響は、北朝鮮問題という点では日本に不利に働く。拉致問題を含む人権侵害についてブッシュ政権は関心を高めつつあるが、北朝鮮問題は外交上の「優先順位」としては低く、また北朝鮮のミサイルが日本には届くがアメリカには未だ届かないという事態から日米の目標の乖離が生まれる恐れがある。日本政府としては、今後イラク問題について尽力することで、アメリカの東アジアの安全保障問題を有利に導くことも重要になってくるだろう。（CISMORリサーチアシスタント・同志社大学神学研究科博士後期課程 上原 潔）

部門研究2 「アメリカのグローバル戦略 と一神教世界」研究会

第3回研究会（2006年10月28日）
場所:同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館2階 マルチメディアルーム1

研究会テーマ「『9・11』5周年とイラク戦争の現状」
「米外交と中東情勢」
宮家邦彦（AOI外交政策研究所代表）
「暴力とテロリズム:東南アジアからみた米国の対テロ対策」
河野 毅（政策研究大学院大学政策研究科助教授）

宮家氏は、米国の外交と中東情勢について報告した。はじめに、ネオコンの検討を端緒に冷戦期以降の米国の外交政策を概観した。その上で氏は、現在の政策を小さな政府で理想を目指す矛盾したものと特徴付けた。続いて米国の中東政策が



いる、つまり「あるべきイスラーム」という観点からすれば「不真面目な」ムスリムが多いという現実）を理解することが重要だとする。従って飯塚氏はフィールドにおけるインタビュー調査を手掛かりに分析する自身の回答を「ムスリム研究」と位置づけた。飯塚氏は寄せられた質問を「イスラム原理主義」（イスラーム主義）、ムスリムと非ムスリム、シャリーアの運用と民主化・議会制民主主義、進化論とイスラーム思想の4つに分類し、ムスリム或いはイスラーム諸国が主張する「イスラーム」とその立場というものは時に錦の御旗であり、「イスラーム」を掲げ、それを否定しないことが当該社会においてどのような働きを促すのかという視点を通した回答がなされた。

議論では現在のイスラーム諸国の政治制度についての具体的な事実確認の後、それらについての公的な場での議論の幅や、可能な政治体制のバリエーションについて、西欧の場合との違いが議論された。またアカデミズムにおける進化論への見解、或いはマレーシアやイランといった特定地域の政治体制の問題などについて、活発な情報交換がなされた。今回の合同研究会は単に「イスラームの現在」についての見識を参加者が養うに留まらず、今後引き続いてそれについて議論する際の更なる共通認識、相互理解を得る上で非常に有益なものだったと言える。

（CISMORリサーチアシスタント・同志社大学神学研究科博士後期課程 高尾賢一郎）

オスマン・バカル

2006年5月、同志社大学特別客員教授として京都に滞在しました。マレーシア帰国後は、2つの大学院の授業を担当し、加えて、複数の研究プロジェクトへの参加、本の出版と、忙しい毎日を過ごしています。現在最も重要な研究プロジェクトはクルアーンの科学的解釈であり、この研究成果は、プロジェクトのスポンサーであるアフル・アル=バイト財団(ヨルダン・アンマン)に来年提出することになっています。

また、CISMORの出版物のための論文執筆の最中です。この論文では、クルアーンにおけるウンマ(共同体)の普遍的概念からヒントを得た「ウンマ研究」という新しいアイデアを扱っており、ムスリムと非ムスリム双方の共同体のほかに動物にも言及しています。この概念は比較宗教学と現代民族学にとって意味のあるものです。



バカル先生の最近の著作

- (1) 'Islam, Ethnicity, Pluralism and Democracy: Malaysia's Unique Experience' Khan, M. A. Muqtedar, ed., *Islamic Democratic Discourse* (Lanham, MD: Lexington Books, 2006), pp. 63-83.
- (2) 'Islam and the Malay Civilizational Identity: Tension and Harmony between Ethnicity and Religiosity' J. J. Donohue and J. L. Esposito., eds, *Islam in Transition: Muslim Perspectives* (New York: Oxford University Press, 2007), pp. 480-487.
- (3) *The Qur'an on Interfaith and Inter-civilization Dialogue: Interpreting a Divine Message for Twenty-first Century Humanity* (Kuala Lumpur: ISUGU and IIITM, 2006).
- (4) *Classification of Knowledge in Islam* (Kuala Lumpur: ISTAC, 2006).

中山善樹

はやいものでエックハルト研究を始めてから、30年以上経ってしまった。

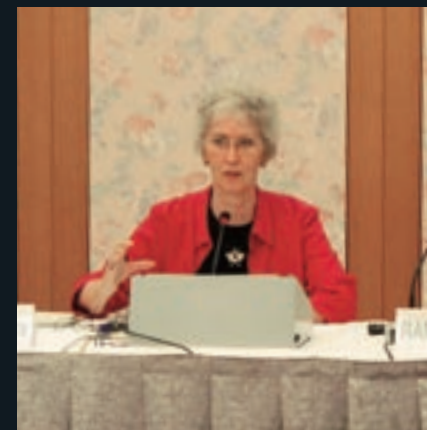
学生時代いろいろな哲学書を読みあさって最後にゆきあたったのがエックハルトだった。当時はまだあまり注目されていなかったラテン語著作を読んでいたところ、とてつもなくおもしろいものだった。私は研究的をしばり、ラテン語著作をなしうるかぎり精確に読解してみようと心に決めた。エックハルトの中世ラテン語はありとあらゆる引用で飾られた難解なものだったが、運良く出版の機会に恵まれ、現存のラテン語テキストのほぼすべてを翻訳することができた。数年まえからは既刊のものも大幅に改訳し、詳細な註と解説をつけて「エックハルト、ラテン語著作集」全5巻としてまとめる作業に入っており、現在までのところ第1巻「創世記註解、創世記比喩解」、第2巻「出エジプト記註解、知恵の書註解、雅歌註解」が刊行された。この仕事は文字どおり私のライフワークとなった。今は健康のゆるすかぎり研究を続けていきたいと希っている。



バーバラ・ブラウン・ジクムンド

2006年は、ワシントンDCにあるアメリカ・カトリック大学のライフ・サイクル研究所(LCI)の共同研究員として過ごしました。LCIは公共政策に、ローマ・カトリックの社会思想に見出される諸テーマへのアメリカにおける

宗教的責任を関係づけようとする社会学的研究を行っています。また、全米キリスト教会協議会の宗教間対話委員会の共同委員長としても活動しました。この委員会とともに、昨年9月に、カナダのモントリオールで開催された国際会議「9・11後の世界の宗教」に出席し、フォーラム「罪の許しと和解:様々な宗教の伝統という観点から」の議長を務めました。11月にはワシントンDCで行われたアメリカ宗教学会年次大会に参加し、CISMORと京都・宗教系大学院連合(K-GURS)が開催したレセプションに関わりました。



越後屋 朗

2000年夏にメギド(イスラエル)での発掘調査に参加して以来、研究の中心はイスラエル・パレスチナにおける考古学的調査です。昨年の夏は、テル・レヘシュでの発掘調査に参加する予定でした。しかし、イスラエルとヒズボラの戦闘により、出発直前になって調査は中止となりました。2003年のエン・ゲヴでの発掘調査もイスラエル・パレスチナ情勢の悪化で出来ませんでした。発掘調査はまさに過去に目を向けるものですが、調査対象である発掘場所は現在の政治状況と密接に関わっています。

私の現在の関心が発掘調査にあるといっても、考古学者というわけではありません。専門はあくまでもヘブライ語聖書テキストの解釈です。最近では、テキスト解釈における読み手の背景(コンテキスト/ロケーション)が強調される傾向にありますが、やはり解釈においてテキストの歴史的背景はひじょうに重要です。しかしヘブライ語聖書の場合、それについての情報が十分だとは決まていません。だからこそテキストの歴史的背景の解明に重要な考古学的成果に関心を持つようになったわけです。

さて、ヘブライ語聖書テキストをどう読むのか。私の読み方は、テキストの「非神話化」であり、「再人間化」であり、「相対化」です。実は、こうした作業を通してこそ、唯一者の一部が垣間見えるのではないかと考えています。



2006年度活動報告

12月6日
『2005年度研究成果報告書』発行

12月9日
第2回CISMORユダヤ学会議
「ユダヤ学の多様性:取り巻く異文脈との対話」
会場:新島会館

12月11日
一神教学際研究センター・神学部・神学研究科共催 公開講演会
「サウジアラビア王国と、中東の平和と安定への役割」
ファイサル・ハサン・トゥラード(駐日サウジアラビア王国特命全権大使)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

12月18日
特定研究プロジェクト2:研究会(3)
「レザー・シャー独裁と国際関係 ― 転換期イランの政治史的考察―」
発表:吉村慎太郎(広島大学総合科学部助教授)

12月26日
一神教学際研究センター・シャイフ・アフマド・クフタロウ財団共催
国際シンポジウム『『新中東』の光の下のスナ派・シーア派関係の未来」
会場:シャイフ・アフマド・クフタロウ財団(シリア・ダマスカス)

2月2-3日、8-9日、13-14日
ヘブライ語インテンシブ・コース

2月26日
特定研究プロジェクト3:研究会(2)
「近代東アジアが出会ったもう一つの西洋科学:入華プロテスタント宣教師の科学啓蒙活動」
発表:八耳俊文(青山女子学院短期大学教養学科教授)

2月28日
『JISMOR(一神教学際研究)3』発行

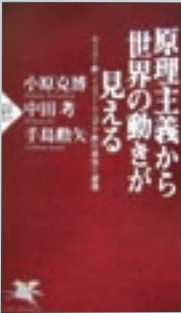
3月7日
部門研究3:研究会(1)
「大川周明と折口信夫 ― 明治期の宗教思想家たちと『一神教』―」
発表:安藤礼二(多摩美術大学美術学部助教授)

3月17日
一神教学際研究センター・日本オリエント学会共催
公開講演会
「古代エジプト人の神々」
吹田 浩(関西大学文学部教授)
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

3月31日
『CISMORユダヤ学会議』報告書第2号発行

2006年度刊行物

小原克博・中田 考・手島勲矢著
『原理主義から世界の動きが見える ―キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像―』
出版社:PHP研究所



森 孝一編著 同志社大学一神教学際研究センター企画
『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか ―ムハンマドの風刺画』事件の本質―』(明石ライブラリー103)
出版社:明石書店



編集後記

「京都・宗教系大学院連合」をご存じでしょうか。京都を中心とした宗教系の大学院7つと大学1つが2005年7月31に設立した学術ネットワークです。英語ではKyoto Graduate Union of Religious Studiesと表記し、略称はK-GURS(ケー・ガース)です。加盟校は、大谷大学文学研究科、高野山大学文学研究科、種智院大学仏教学部、同志社大学神学研究科、花園大学文学研究科、佛教大学文学研究科、龍谷大学文学研究科で、協力団体の1つとして私たち同志社大学一神教学際研究センターも加わっています。

前号に引き続き、「京都」の特集をしている今号では、このK-GURSに加盟している高野山大学の室寺先生と龍谷大学の高田先生に「京都と仏教」をテーマにしたエッセイを執筆していただきました。お忙しい中、執筆依頼を快くご承諾いただき、誠にありがとうございます。また、裏表紙エッセイの執筆者をご紹介いただきました裏千家業継の金澤宗維先生(1981年同志社大学文学部卒)にも御礼申し上げます。

今号に、11月の国際ワークショップと12月の第2回ユダヤ学会議についての報告を載せています。詳細な報告は後日、一神教学際研究センターのウェブサイトおよび報告書を通して公開されることになっています。

次号の特集はまだ決まっていません。取り上げてほしい都市(宗教と関係する)がありましたら、一神教学際研究センターまでお知らせ下さい。これまでは、エルサレム、カイロ、ニューヨークと旅し、京都に戻ってきたところです。

K-GURSの活動については、<http://www.kgurs.jp/>をご覧ください。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関	国名
2006年			
1月19日	ニック・カーター	アンドーバー・ニュートン神学校	アメリカ
2月22日	マスフード・ダーヘル	レバノン大学	レバノン

マレーシア
夏期研修
プログラム
(9月4-26日)

塩崎悠輝
同志社大学神学研究科博士後期課程

2006年9月に一神教学際研究センター(CISMOR)が行ったマレーシア研修は、同志社大学博士後期課程学生の調査・研究向上を目的としており、具体的にはマレーシアにおける実地調査および現地研究機関での発表を通して、調査・研究の向上が図られた。

実地調査は、クアラ・ルンプールを拠点に

シンガポールおよび半島北部トレンガス、クランタン、ケダ、ペナンなどにおいて行われた。調査はマレーシアにおけるイスラームと国家の関係、国家におけるウラマー(イスラーム法学者)の役割、などであり、イスラーム発展庁、各州イスラーム宗教局などの行政関係者、マレーシア・イスラーム党指導者たちからの聞き取り調査および行政、政党等の機関における資料収集が主な内容であった。他に、国際イスラーム大学、マレーシア国民大学、マレーシア科学大学、在シンガポール日本大使館などの現地研究者およびフィールド・ワーク中の日本人研究者らとのレクチャーおよび情報交換があった。また、宗教学校やイスラーム金融実務担当者への訪問も行われた。およそ3週間という短い期間と過密なスケジュールではあったが、得られた資料は、今後の研究に極めて有用なものであったといえる。

これら調査・研究の成果は、国際イスラーム大学の国際イスラーム思想・文明研究所

(ISTAC)の研究会「ISTACフォーラム」において『マレーシアにおけるイスラームと国家(Islam and State in Malaysia)』と題されて英語で発表された。国際イスラーム思想・文明研究所は、東南アジアにおけるイスラーム思想研究の主要研究機関である。発表について、研究所の教授陣および学生、在マレーシア日本人研究者らと極めて活発な議論を行うことができた。それに、今後の研究のために非常に有用なアドバイスを得ることができた。

総体的に今年度のCISMORマレーシア研修はかぎられた期間に調査と発表を同時進行することによって、目に見える研究の向上を達成する、という目標を持つものであったが、東アジアおよび太平洋地域イスラーム宣教評議会(RISEAP)をはじめとするマレーシア現地の政府、教育、政党等の諸機関の協力により、着実な成果をあげることができたと思う。



マレーシア・イスラーム党の党首と筆者



マレーシア北部クランタン州の州都コタ・バル



マレーシア北部ケダ州の宗教学校生徒たち

京都の味力

京都では、御所の年中行事や神社仏閣の数々の行事・祭事に菓子が供えられてきました。

中国文化との交流や仏教伝来によって、遣唐使が唐朝から持ち帰った「唐菓子」^{からくだもの}が都である京の町に伝わり、今も神饌菓子^{しんせん}として伝えられ、八坂神社や加茂の社、北野神社に供えられています。また、初めは餅などであったものが、味覚や指先の技術の発達により、色・形・目に楽しい「飾菓子」や、風味と季節を一目で伝える「和菓子」が考案されました。

平安京が定められ、御所の紫宸殿には左近の桜と右近の橘が植えられましたが、橘は菓祖とされる田道守が持ち帰ったものと伝えられ、平安時代の菓子の発展は、御所あつてのものとも言えます。

室町時代には、最も優れた原料と技術で調製された菓子が禁裡・幕府などに献上され、京都の菓子巧達が「献上菓子」「御用菓子」と称していたことから「上菓子」と云われるようになりました。上菓子は足利時代^{しんこう}に糖菓が作られて以来のもので、砂糖はもともと薬種問屋が扱う薬品で、京都では沈香屋が扱っていました。砂糖が初めて菓子に用いられたのは禁中であり、御所羊羹・御所落雁などはその頃発祥したと聞きます。その後、唐菓子や南蛮菓子による新風を取り入れながらも日本の伝統を受け継ぎ、江戸中期には業者も増えました。その頃、餡ころ餅を毎日御所にお届けした店の話も残っています。明治以後は茶道と共に発達し、内国勸業博覧会やパリ第二回万博に京菓子が出品され、世界にこの技術が知られるに至りました。

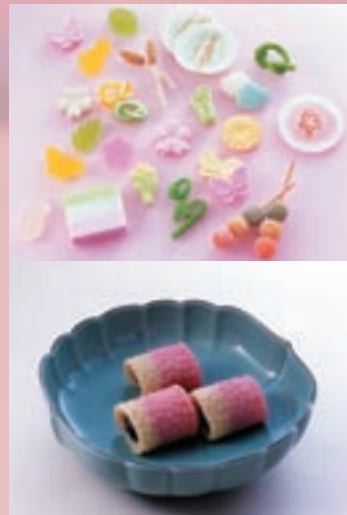
「茶菓子」は京にある各御家元で四百年にわたって育まれてきました。当初は「点心」^{てんしん}と呼ばれ、焼栗や干柿、昆布などがその役目を果たしていました。その後、四季折々の自然の美しき彩りを映して、十二ヶ月の季節の菓子が生まれ、銘がつけられるようになり、また、人々に好まれるように色々と研究されてきました。

お茶のお菓子は五感で味わうと云われています。まず“視覚”です。季節を感じとり、形や色と器のバランスを鑑賞する事が大切です。次は“触覚”。手ざわり、歯ざわり、舌ざわりによって、溶解してゆくやわらかさを感じることが大切です。次に“味覚”で、口に残る菓子の味。また“嗅覚”では季節の香りが伝わってきます。五つ目は菓子の銘から来る“聴覚”です。このように一つの菓子を、五感を働かせて味わえば、一段とおいしく頂けます。茶席でいただく味覚には、自然にお茶と会席の味と菓子の味が相俟っているのです。

私が子供の頃は、年末になると黒塗の箱に正月の美しいお菓子の見本を持って、業者が注文を取りに来られたものです。新春には年賀釜や初釜の催しがあり、普通の家でも茶菓子の用意をするところが多くありました。新島襄先生の奥様も、昔、父の頃によく来られて、全国の菓子や茶席に合う菓子を楽しまれておられたと耳にしておりました。

やはり京の魅力は京に合った味力でしょう。

(裏千家茶道名誉教授・和菓子研究家 鈴木宗康)



写真上:春の干菓子 写真下:菓銘「花の袖」
(写真提供:俵屋吉富)